

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

☑ チェック

1 大納言 *成通卿の鞠は、凡夫のしわざにはあらざりけり。さまざまにふしぎに **A** 事のみありける中に、鞠を高く蹴

あぐる事、1 すべての人には *三かさまざりたりけり。ある日、鞠を高くあげられたりけるに、辻風の物を吹き **a** あぐる

やうに、鶯・鳥付きたりと **B** ほどに、空に上がりて雲の中に入りて、見えずしてとどまりにけり。不思議なりける

ことなり。父の大納言、*そのかみ仏言を召して仏を造らせて **b** むられたりける時、*はしの御簾をあげて格子のもとを

5 よせかけられたりけるに、成通卿いまだ若かりけるに、庭にて鞠をあげられるが、鞠、格子と簾との中に入りけるに続

きて飛びいられるが、父の前、*無骨なりければ、鞠を足にのせて、その *板敷を踏まずして、*やまがらの *もどり

うつやうに飛びかへられたりける、 **X** にあらざりけり。「我が *一期に、このとんばうがへり一度なり」とぞ自称せ

られける。おほかたこの大納言は、かく若くより早業を好み給ひて、*築地の *はら、もしは *檜垣のはらなどをも走ら

れけり。また屋の上に臥して *棟よりころびて軒にては *安座せらるるをりも **c** ありけり。父の卿、 **d** 制止せられけれど

10 も、かなはず。この事を鳥羽院聞こしめして、御制止ありけれども、なほやまざりければ、御前に **e** 召して、「汝が早態

を好むは、何の *詮かある」と仰せ下されければ、「さしたる詮は候はず。ただし *拝趨の間、 **C** 召し具し候ふ *僮

僕、一兩人には **f** 過ぎず候ふ。雨の降り候ふ日、一人は笠をさして、*車の簾を持ちあぐる者の候はぬ時、車の *轆を

土に置きながら、片手に左右の *袴をとり、片手には簾を持ちあげて飛び乗り候へば、 **2** さらに装束も損ぜず、奉公第

一の用なり」と申されければ、その後は、 **3** 院、御制止なかりけり。 **問四・理由** (「古今著聞集」より)

問五・問六
登場人物とその特徴
を押さえる

問五
文脈から適切な語を
補う

問四
人物の発言の趣旨を
押さえる

注

- *成通ニ藤原成通。 *三かさニ三倍。 *そのかみニその昔。 *はしニ家の中で外側に最も近いところ。
- *無骨ニ無作法。 *板敷ニ格子の外側の縁側の板。 *やまがらニ山雀すずめ。 *もどりニ宙返り。 *一期ニ一生涯。
- *築地ニ泥土を積み上げて造った塀。 *はらニ側面。 *檜垣ニ檜ひのきの薄い板を編んで張った垣根。 *棟ニ屋根の中央の一番高いところ。 *安座ニ安定した姿勢で座ること。 *詮ニききめ。 かい。 *拝趨ニ宮中に参上する。
- *僮僕ニ召使いの少年。 *車の簾ニ牛車の乗り込み口に下げる簾。 *轆ニ牛車で、牛と車をつなぐ二本の長い棒。「轆を土に置」くと、車の前方が下向きになるため、後ろの乗り込み口が高くなる。 *袴をとりニ着物の裾すそをたくし持つ。

問一 傍線 a ～ f の動詞の (i) 活用の種類、(ii) 活用形として最適なものを、それぞれ次の中から選び、記号を記せ (同じ記号を何度用いてもよい)。 (12点)

- (i) ア四段活用 イ上一段活用 ウ上二段活用 エ下一段活用 オ下二段活用
- カカ行変格活用 キサ行変格活用 クナ行変格活用 ケラ行変格活用
- (ii) ア未然形 イ連用形 ウ終止形 エ連体形 オ已然形 カ命令形

問二

A

 ～

C

 に最適なものをそれぞれ次の語群の中から一つずつ選び、適切な活用形に直して記せ。 (6点)

- A ありがたし・うしろめたし・すさまじ・よしなし
- B かしづく・なやむ・ののしる・やつす
- C いたづらなり・かたくななり・すすろなり・わづかなり

問三 傍線 1・2 を口語訳せよ。 (10点)

問一 文法事項を押さえる

問二 多義語・古今異義語などを文脈に沿って解釈する

問三

問四 傍線3とあるが、それはなぜか。三十五字以内で以下の空欄を埋め、説明を完成させよ。

(12点)

□ という成通の返答に納得したから。

問五 □ X に最適な語句を文中から抜き出して記せ。

(5点)

問六 問題文を内容の上から二つに分ける場合、後半はどこから始まるか。後半の最初の五字を文中から抜き出して記せ

(句読点等も一字として数える)。

(5点)

問六
文章全体の展開を押しさえる

傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える

出典

『古今著聞集』巻十一「侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事」
『古今著聞集』は、十三世紀半頃に成立した説話集。 たちはなのなりすえ 橘 成季編。
全部で七百二十あまりの説話を、政道忠臣・和歌・馬芸・哀傷など三十のテーマに分類して、それぞれ年代順に配列し、しかも前後の説話が内容上、相互に関連を持つような整然とした構成になっており、説話の百科事典とも言える体裁になっている。

解答

- 問一 a (i) オ (ii) エ b (i) イ (ii) ア
c (i) ケ (ii) イ d (i) キ (ii) ア
e (i) ア (ii) イ f (i) ウ (ii) ア
- 問二 A ありがたき B ののしる C わづかに

問三 1 普通の人に比べて三倍すぐれていた

2 まったく装束を傷めることもなく

問四 早業は雨の日に宮中に参上する際、装束を傷めないので奉公の

役に立つ

(32字)

問五 凡夫のしわざ

問六 おほかたこ

解説

今回の文章の概要

蹴鞠の達人である藤原成通の凡人離れた身軽さと機転

・成通卿の蹴鞠は、「凡夫のしわざ」ではない

凡人離れた身軽さを表すエピソード二つ

・鞠を普通の人より三倍高く蹴り上げられる (↓問三1)

天に上がって降りてこない鞠

・一生に一度と自分で言うとなんぼ返りの様子

＝「凡夫のしわざ」ではない(↓問五)

・早業を好む成通と鳥羽院のやりとり

若い頃から早業を好んできた成通

←

父親・鳥羽院が止めても聞かない

鳥羽院「お前が早業を好むのは、何のためか(＝汝が早業を好むは、何の詮かある)」

成通「雨の日に宮中に参上する際、まったく装束を傷めることもなく、それがご奉公の役に立ちます(＝さらに装束も損せず、奉公第一の用なり)」(↓問三・問四)

鳥羽院は納得し、その後止めることはなかった＝成通の機転

☑ 文法事項を押さえられたか

問一 動詞の活用を確認する問題。活用の種類は九種類あるが、決まりを覚えれば見分け方は難しくない。上一段・下一段・変格活用は数が限られているので、それぞれ覚えておく。それ以外の四段・上一段・下二段活用は、打消の助動詞「ず」を付けて未然形を作り、活用語尾の母音がア段かイ段かエ段かで見分ける。活用形については、直後の語に着目して接続をもとに判断すればよい。動詞の活用は基本中の基本なので、確実にマスターしておこう。

a 直後が「やう」という体言なので、活用形は連体形。未然形を作る

ると「あげ(ge)」「ず」と、活用語尾の母音がエ段なので、下二段活用だとわかる。終止形は「あく」。

b 「ある」という上二段活用動詞。直後が未然形接続の助動詞「らる」なので、活用形は未然形。なお、上二段活用動詞は「着る」「見る」「似(煮)る」「射(鑄)る」「干る」「居(率)る」など十数語だけなので、覚えておこう。また、ここでは問われていないが、上一段活用動詞は活用の行に注意すること。b はひらがなで書かれているのでわかりやすいが、「居(率)る」はワ行、「射(鑄)る」はヤ行である。

c 「あり」はラ行変格活用動詞。直後が連用形接続の助動詞「けり」なので、活用形は連用形。なお、ラ行変格活用動詞は、「あり」「居(り)」「侍(り)」「いまそがり(いまそがり・いますがり・いますがり)」の四語のみ。

d 「制止す」というサ行変格活用動詞で、ここは複合動詞の形になっている。サ行変格活用動詞は「す」「おはす」の二語のみだが、このようにさまざまな語に付いて複合動詞をつくるので注意。

● サ行変格活用の複合動詞 ●

和語+「す」＝「旅す」「心す」「あるじす」等。

形容詞・形容動詞+「す」＝「専らにす」「重くす」「全うす」等。

漢語+「す」＝「愛す」「察す」「感ず」「進ず」等。

*なお、「……ず」となっても「ザ行変格活用」とは言わない。

ここは、「制止」という漢語に「す」が付いたもの。直後が未然形接続の助動詞「らる」なので、活用形は未然形。

e 未然形を作ると「召さ(sa)」「ず」となるので、四段活用

で連用形。「召す」は、ここでは「呼ぶ」の尊敬語で、〈お呼びになる〉の意。

f 打消の助動詞「ず」に接続する未然形になっている。「過ぎ（g i）+「ず」で、母音がイ段なので、上二段活用動詞。

☑ **多義語・古今異義語などを文脈に沿って解釈できたか**

問二 動詞・形容詞・形容動詞の活用と重要古語を確認する問題。

A は、成通の蹴鞠がどういうものであるかを総括的に述べた部分。

直前に、「ふしぎに（ふしぎなり）」という形容動詞が用いられていることや、問題文に見られる成通の蹴鞠が普通では考えられないような技であることから考える。不思議で普通でないことは、そうは起こらないものである。それを言い表すには、「**ありがたし**」が最適。現代語では主に、〈感謝したい・ありがたい〉の意で用いられるが、古語の場合は、〈めつたにないほど珍しい・めつたにないほどすぐれている〉の意で用いられる。活用形は、直後が「事」という体言なので、連体形「**ありがたき**」に直す。「**ありがたかる**」とはしない。〈から・かり・〇・かる・〇・かれ〉と活用するカリ活用は、原則として後に助動詞が付く場合に用いられる。

なお、「うしろめたし」は、〈気がかりだ・心配だ〉、「すさまじ」は、〈興ざめた・荒れ果ててもの寂しい〉、「よしなし」は、〈無意味だ・理由がない〉の意。

B は、成通の蹴り上げた鞠が空高く舞い上がった時、鳶や鳥が蹴り上げた鞠にとまっていると「〜」している場面である。この「〜」に入る言葉として適切なのは、〈**大声で騒ぐ**〉意の「**のしる**」（主語は

問題文に明示されていないが、文脈上、鞠を見ていた人々と解釈できる）。活用形は、直後が「ほど」という体言なので、連体形に直す。「のしる」は四段活用なので、連体形は終止形と同じ形になる。

その他、「かしづく」は〈大切に育てる〉、「なやむ」は〈苦勞する・病氣をする〉、「やつす」は〈みすばらしくする・出家する〉の意を表す。

C は、成通が、自分の召し使う童は（一兩人（＝二人）だけである）と言っている直後の文脈から考えると、〈ほんの少し・たったの〉の意の「**わづかなり**」が最適。直後が動詞なので、連用形「**わづかに**」に直す。なお、形容動詞の連用形は「**……に**」と「**……なり**」の二つの形があるが、助動詞に接続する以外は、ほとんど「**……に**」の形になる。

設問に挙げられたその他の語、「いたづらなり」は、〈ひまだ・無駄だ〉、「かたくななり」は、〈頑固だ・粗野だ〉、「すずるなり」は、〈あてもない・思いがけない〉の意である。

以上、どれも重要古語なので、意味はきちんと押さえておこう。

☑ **傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換えられたか**

問三 1品詞分解すると、「なべて／の／人／に／は／三かさ／まさり／たり／けり」となる。「なべて」は副詞で、〈一般に・普通〉の意。「かさ」は、高さや大きさを表す。「三かさ」に「三倍」という「注」をつけたが、ここは〈三倍の高さ〉ということ。「まさり（まさる）」は、〈他と比較してすぐれている〉の意。「たり」は完了・存続の助動詞「た」の連用形、「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形である。よっ

て傍線部全体で、(成通の蹴り上げる鞆の飛ぶ高さは) 普通の人に比べて三倍すぐれていた」ということを言っている。

2品詞分解すると、「さらに／装束／も／損ぜ／ず」となる。呼応の副詞「さらに」の訳し方がポイント。下に打消の語を伴って、「まったく……ない」の意を表す。ここでは打消の助動詞「ず」の連用形と呼応している。「損ぜ(損ず)」は問一でも見たサ行変格活用動詞で、ここでは(いたむ・傷つける)の意。牛車に飛び乗ることで、雨の日でも装束をまったく傷めないですむと言っているのである。

☑ **テーマ問題** 人物の発言の趣旨を押しえられたか

問四 設問にある通り、成通が返答した内容を受けて、「御制止なかりけり」という流れである。よって、院がなにを「制止」しようとしたのか、成通がどのように返答したのかを文脈に沿って見ていけばよい。

成通の早業を、「父の卿」が止めようとしたが、成通は聞き入れなかった(Ⅱℓ9・10「制止せられけれども、かなはず」。さらに鳥羽院が止めても、なおやめようとしな(Ⅱℓ10「鳥羽院聞こしめして、御制止ありけれども、なほやまざりければ」。そこで鳥羽院が早業を好む理由を尋ねたところ(Ⅱℓ10・11「汝が早業を好むは、何の詮かある」。成通は「さしたる詮は候はず」と答えながらも、「ただし拝趨の間……」以下で、宮中に参上する際の様子を述べている。

・成通が召し使っているのはたった二人

←
・雨の日に車を降りる際、人手が足りない

←
・早業で身軽に飛び降りることで、装束を傷めずにする

←
・そのことは春公の役に立つ

よって、鳥羽院はこの合理的な返答に納得したため、もはや制止しようとはしなかったと考えられる。成通は、ただ早業に長けていただけでなく、機知にも富んでいたことが、この話からうかがえる。

○ **必修テーマを確認** 「頻出パターン1 知恵と機転」に当て

はまる、見事な応酬で院を感じさせた成通の機転を押しえよう！

☑ **登場人物とその特徴を押しえられたか**

☑ **テーマ問題** 文脈から適切な語を補えたか

問五 成通が、鞆を足に乗せたまま宙返りをして建物の中から庭に出たという話について、(X)ではなかった」と語っている。このXに入る語句を文中から探すわけだが、冒頭の一文に着目しよう。問題文は、冒頭で成通の鞆について総括的に述べ、それから具体的なエピソードに移っていく構成になっている。その冒頭の総括では、「凡夫のしわざにはあらざりけり」と述べられている。「凡夫」は、(普通人・平凡な人)の意。その言葉が、Xを含む部分で改めて確認されているのである。

- ☑ 登場人物とその特徴を押さえられたか
 ☑ 文章全体の展開を押さえられたか

問六 この話は、はじめに成通の蹴鞠の巧みさについて語られるが、それは問五で確認したように、「凡夫のしわざ」とは思えないものであった。このように蹴鞠について直接語られるのは、空欄Xの後の成通自身の言葉までである。⑧の「おほかたこの大納言は」以降は、成通の蹴鞠の技を支える成通の機敏な動作、すなわち早業についての話題に移っている。よって、「おほかた」が正解となる。問題文は、前半が成通の蹴鞠の技の巧みさ、後半が早業について、ということになるわけである。

全訳

大納言成通卿の蹴鞠は、普通の人の技ではなかった。いろいろと不思議なAめつたにないようなことばかりあった中で、鞠を高く蹴り上げることは、1普通の人に比べて三倍すぐれていた。ある日、鞠を高く蹴り上げたところ、つむじ風が物を吹き上げるように、鳶や鳥が蹴り上げた鞠にとまっていると（見ていた人々が）B大声で騒いでいるうちに、（鞠は）空に上がり雲の中に入って、見えなくなってしまう。不思議なことである。父の大納言が、その昔仏師を招いて仏像を造らせてとどまっていられなかった時、家の外側に近いところの御簾を上げて格子のもとに寄りかかりなさいたところ、成通卿はまだ若くて、庭で鞠を蹴り上げたのだが、鞠が、格子と簾の間に入ったのに続いて飛び込まれたが、父の手前、

無作法であったので、鞠を足に乗せたまま、その板敷を踏まずに、山雀が宙返りをするように飛んで戻ったのは、X普通の人の技ではなかった。「自分の一生で、とんぼ返りをしたのはこの一度だけだ」と自称なさっていた。そもそもこの大納言は、このように若いときから早業をお好みになり、築地の側面、あるいは檜垣の側面などをも走っておられた。また屋根の上に臥せて棟から転がり落ち軒の上できちんと座りなされる時もあった。父の卿は、（息子の早業を）制止なさったが、止められなかった。このことを鳥羽院がお聞きになり、制止なさったけれども、やはりやめなかったため、御前にお呼びになつて、「お前が早業を好むのは、何のためか」とおっしゃられたので、「これといったかがあるわけではありません。ただ宮中に参上する折、（私が）Cわずかに召し連れております童は、二人に過ぎません。雨が降ります日は、一人は笠をさすので、車の簾を持ち上げる者がおりません時は、車の轆を土に置いたまま、片手で左右の袴の裾をたくし持って、片手で簾を持ち上げて飛び乗りますので、2まったく装束を傷めることもなく、それがご奉公の役に立ちます」と申し上げなさいたので、その後は、3院は、制止なさらなかつた。

- ・ 文法事項を押さえる
- ・ 多義語・古今異義語などを文脈に沿って解釈する
- ・ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える
- ・ 人物の発言の趣旨を押さえる
- ・ 登場人物とその特徴を押さえる
- ・ 文脈から適切な語を補う
- ・ 文章全体の展開を押さえる